



みんなのがっこうの どうぶつ

2014 年 月 6 月下旬
第 5 号

発行責任者：公益社団法人 栃木県獣医師会 南支部 学校飼育動物委員 すずき しげゆき
☎0285(41)0323 fax0285(41)0322
電子メール suzuki@brace-ah.jp



この号の内容

- 1 高病原性鳥インフルエンザその後
- 2 根拠に基づく動物飼育 脳科学1
- 3 飼育舎を工夫する 雨・暑熱対策

1. 高病原性鳥インフルエンザ その後

先月号で話題に挙げました「高病原性鳥インフルエンザ」は、最後の感染確認個体の回収から 45 日を経過したことから、対応レベルを一段階引き下げ、レベル1（一番低いレベル）に移行されました。

引き続き、注意は必要ですが、感染拡大の懸念は払拭されつつある状況のようです。

高病原性鳥インフルエンザの予防で得た、衛生に関する知識や経験を生かし、引き続き、衛生的な環境で動物たちを飼育されることをお願いいたします。

参考：[環境省「高病原性鳥インフルエンザの情報」](#)



2. 根拠に基づく動物飼育 脳科学 1

前号の続き…脳は、三層構造であるとされています。(参考：[Dr. Paul D, MacLeanの“三位一体脳”論](#))

脳幹部と解剖学的にされている、脳の一番深い中心の部分は、呼吸や心拍を維持したり、テリトリーの防衛、危険に対する反応(回避、逃走など)などの本能に関する働きを持っています。脳科学的には「爬虫類脳(原始脳)」と呼ばれ、「怒り」や「不快」などの感情に関係しています。

脳幹部を取り囲む部分は、解剖学的には「大脳辺縁系(大脳旧皮質)」と呼ばれる部分で、自身の生命の維持や子孫を残すことに関係した感情や快楽刺激を司っています。脳科学的には「哺乳類脳(感情脳)」と呼ばれ、「生殖行動に関係する感情」や「自己防衛行動に関係する感情」、「長期記憶」などの感情に関係しています。

大脳辺縁系を取り囲み、脳の表面までの部分は、解剖学的には「大脳(大脳新皮質)」と呼ばれる部分で、言語、記憶、学習能力、空間把握能力、思想や論理的思考などに関係する働きを持っています。脳科学的には「霊長類脳(人間脳)」と呼ばれ、複雑な感情に関係しています

最近の脳科学では、これら三層の「脳神経」による複雑な連携が、「感情」や「思考」を決定している事が分ってきました。特に「人間脳」の内部は、生まれた時には真っ白で、その後の経験が書き込まれ、多く経験したほど充実するといわれています。また、どのように脳神経が連携していくかが「人格」や「性格」を大きく左右することも解ってきたようです。

人間の赤ちゃんや子犬、子猫などを見て、「かわいい」と感じる感情は、「本能」的な感情で、「母性本能」や「労り本能(弱っている者をまもる)」と関係した感情で、この感情は「哺乳類脳」に由来します。

次号につづく

- ★「爬虫類脳」は「怒り」や「不快」に関係する。
- ★「哺乳類脳」は「感情脳」と呼ばれている。
- ★「人間脳」は、「言語、記憶、学習能力、空間把握能力、論理的思考」に関係する。
- ★どのように脳神経が連携していくかが「人格」や「性格」を左右する。



★老朽化している飼育舎では「屋根からの雨漏り」や「錆びた骨組みの隙間からの浸水」が起こる。

★台風の場合には、校舎内に一時避難。

★「よしず」や「すだれ」で日陰を作る。

★昼休み時間に飼育舎の周囲に散水する。



屋根の老朽化による雨漏りや錆びによる浸水に注意



3. 飼育舎を工夫する 雨・暑熱対策

今年も梅雨に入りましたが、ここ数年の梅雨は、まるで熱帯のスコールのような豪雨が多く、また、梅雨が明けた夏も、35℃を越す猛暑日が珍しくないと感じる異常気温の日が、当たり前ようになってきたように感じられます。



雨対策

ウサギやニワトリ、チャボなどの地面で生活している動物は、浸水に気を付けてください。

老朽化している飼育舎では、“屋根からの雨漏り”や“錆びた鉄の骨組みと立ち上がりのコンクリートの隙間から浸水”が起こります。本格的な雨が降る前に、飼育舎の点検を実施してみてください。実際に、雨が降っているときに飼育舎に入り、状況を点検してみると良いでしょう。

水の侵入が確認できた部分は、しっかりと補修をしてください。十分な補修ができたとしても、台風や「大雨警報」が発令されるような予報の時には、あらかじめケージに移して校舎内に一時避難させておいた方が安全です。

吹き込んだ雨水により水溜りが出来るようなら、水はけのよい砂に入れ換えましょう。また、コンクリートの床は「排水口の詰まり」がないかを点検してください。

水はけが悪い場合は、ぬかるんで、爪の先に土の塊が出来て病気の原因になります。水分の多い土は湿度が高くなり、動物たちも不快に感じますし、いろいろな病気の元になりかねません。

簡単な対策として、「すのこ」などを土間より高い位置に用意し、浸水からの避難場所として工夫をしましょう



暑熱対策

ウサギやニワトリ、チャボなどの地面で生活している動物たちは、暑さの影響を直接受けます。真夏の運動場の地面表面温度は 50～60℃に達するといわれています。地面に近いところの気温は、40℃近い気温となります。地面で生活している動物たちは、人間が感じるよりも高い温度に耐えていますので、暑熱対策は絶対必要です。

暑熱対策の一番のポイントは、日陰を作ることです。日陰の気温は、日向の気温より 5℃位低くなります。飼育舎の南面(可能ならば西面も)に「よしず」や「すだれ」などを設置すると良いでしょう。

飼育舎近くに落葉樹を植えるのも効果的です。

また、「打ち水」でさらに気温を下げられますので、お昼休み時間に飼育舎の周囲に散水することも良いでしょう。

暑熱対策が十分でないと熱中症になります。

熱中症の症状は、食欲の低下、飲水量の低下、運動性の低下、呼吸の速迫、高体温などです。

症状の発現後、数時間で死亡することもありますので、こまめな観察を心がけてください。

ご要望をお寄せください！

色々なご要望にお応えします。遠慮なく、ご要望をお寄せください。

発行責任者まで・・・
suzuki@brace-ah.jp



公益社団法人 栃木県獣医師会
Tochigi Veterinary Medical Association

公益社団法人 栃木県獣医師会 学校飼育動物委員会

〒320-0032
栃木県宇都宮市昭和1-1-23

☎0286(22)7793 Fax0286(21)9660

http://www.tochigi-vet.or.jp/activity/chairman_02.html